

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ (二三)

第八三則 道吾看病

〔示衆〕

衆に示して云く、通身、病と做らば、摩詰も瘞し難し。是れ草、医すに堪ゆれば、文殊、善く用ゆ。争でか向上の人に参取して、箇の安樂の処を得るに如らん。

〔本則〕

〔示衆〕 瀉山・道吾に問う、甚麼の処より来る。〔来処、分明なることを要す。〕吾云く、看病し来る。〔福田第一は即ちなきにあらざる。〕山云く、幾人ありて病むや。〔更に両頭を要す。〕吾云く、病者と不病者とあり。〔却つて是れ備に第二月あり。〕山云く、不病者は是れ智頭陀なることなしや。〔陷虎の機なり。〕吾云く、病と不病と総て他の事には于らず、速やかに道え、速やかに道え。〔却つて胡蘆、倒に藤に繳わる。〕山云く、道い得るもまた没交涉。〔禍いは慎家の門に入らず。〕

今回は、唐代の瀉山と道吾の機縁です。『従容録』の本則は、圧倒的に唐代の禅匠たちの言動をテーマとしています。が、それは、当時の禅が純粹であって、みずみずしくナウな息吹につつまれていたからです。

瀉山も道吾も初登場ですね。瀉山とは靈祐（七七一〜八五三）のことで、百丈懷海の法嗣です。湖南省の省都、長沙市から北西一四〇キロにある大瀉山に道場を開き、千五百人もの雲水が集まったという大道場を形成した巨匠であり、後に瀉仰宗の開祖とされる人です。ふつうは瀉山の名で呼ばれています。今なお大瀉山には壮大な伽藍が遺っています。

一方の道吾は、円智（七六九〜八三五）が本名。葉山惟儼の法嗣ですが、雲巖曇晟の実兄ともいわれています。のちにはやはり長沙市の東方百キロほどの急峻な道吾山に道場を開いた禅匠で、現在この道場跡は水庫（ダム）になっています。この道吾円智さんが若き日、大瀉山の道場へ修行に行ったときの機縁が今回のテーマというわけです。まず、万松和尚の「示衆」をみましょう。

「全身を病んでしまえば、あの維摩さんでも治せぬわ。ところが文殊さんは草一本で治しちゃったそうなの。だが、どっちもどっち。悟った人に学んでこそ、ホントの大安心

道悟看病





大瀧山密印寺の万仏殿

が得られるものじゃ。」

おもしろいですね。全身を病むとは、迷いのボンノウにとりつかれていること。文殊には、薬草を自在に用いたという故事があります。ところが万松は、こういうことは迷いの有無をこえた力量の人に学んで、はじめて安心決定できるのだ、という。その人物こそは瀧山その人なのですね。

そこで「本則」を意識します。

瀧山が道吾に「お前さん、どこから来たね。」「ハイ、これまで看病してました。」「ホウ、なんぼ病人がおったんや。」「患っている者」といふ者がいました。「患わん者とは、お前さんのことかね。」「私はそんな事に関係ありません。先

生の極意をサツと教えて下さい。」

「おう、何でもいえるがね、所詮そりやあ本物じゃないぞ。」

はじめに瀧山が「来処」を問うのは、前にも書いたように、修行の姿勢や本性を知るためのギラリとした問い。そこで「看病」。仏教では看病は八福田の一つとして大切な徳目なのです。万松のコメントはそれをふまえた語句。ただ道吾のいう看病とは、ボンノウに迷っていた修道者たちを善言化導したなどという思いあがりの意味ではなく、むしろ共に悩み共に学び励まし合ってきたという、道友者としての老婆親切の語ととらえるべきでしょう。

そこで瀧山が、そんなに患っている者がいるのかという問いに、道吾は病不病の両者がいたと答えた。さあ、ここで言葉の上で相対的な二者に分けたから大変。万松はコメントで「第二月あり」ととがめるし、瀧山も、さてはお前さんが不病者だということのか、と辛らつな鉄剣をくだした。ところが道吾はさすがです。自分はそんな事に関わらぬし、私を不病者扱いする先生こそ二月（相対）にわたっているのでは？さもなければホンモノの境地を、と迫った。この辺りの真剣勝負を万松は、藤づるが葫蘆（ヒョウタン）にからみついた、

つまりサカナネジをくらわしたと面白くコメントしています。

しかしドツコイ、瀧山は大物。

ありきたりの言葉では表せないのがホンモノだと教えた。万松は、用心深い家には災難が来ない、さすがは瀧山だというホメ言葉。

わたくしたちは、さきに小稿の第一〇回で、第九四則「洞山不安」を学びました。この時は、洞山さまから病いの身がそのまま看病人なんだという、病不病をこえた本来のはたらきを教わりました。「道吾看病」もまさしく基本は同一。病も不病も患者も看護人も所詮は本来の面目の働きであり、表面的な現象や思いこみは人間的小さなはからいや迷いであることが、大らかに語られているのです。

ただ、洞山さまの場合は実際の重病、瀧山と道吾の場合は身体よりも心の病いがテーマとなっっているわけですが、ともに心身を分けて考え論じない点は同じであり、これが仏教の基本的立場であり、禅ではとくに顕著であります。

ふり返って、現実はどうでしょう。「病は気から」とは知りながら心はおろそかで、医師や病院に頼りっきりの患者がほとんどではないでしょうか。わたくしは、この八月末から九月にかけて入院半月

という未曾有の体験をし、病いや医療について考える貴重な時をもつことができました。

大病院の男性七人部屋の半月は、大勢の患者が入退院をします。驚いたのは、二〇代から三〇代前半にかけての若い男性たちの動向。彼等は先輩者から話しかけられない限りは寡黙。彼等同志の対話もありません。ところが、ナースには甘え、夜の消灯時間後になってもテレビを消さず、タブーの携帯電話でヒソヒソ話し。朝はいち早く喫煙室に走るおぞましき。個人差こそあれ、現代の若者たちの孤独と自己中心的な気風を、はからずも肌で感じた日夜でした。

若者に限らず、病いを医師や病院に頼り切る考えは誤りです。それは、仏前でサンゲをすれば罪が消える教えを信じた盗人が、盗みとサンゲを繰返したという笑えぬ話と同じ。自分自身でできる限りの努力を尽して回復をはかる、こうした自制と自浄の心を見失うと、やがては身も心も本当の重病に冒されてしまうのです。

世間には、身を病んでもすばらしい生き方をしている人も多いですが、それは心が健康だからであります。坐禅人は、つねに自分の生きざまをめざしたいものです。

《一泊参禅会》

柏市 栗田 章

本年六月七・八日の両日、大雄山最乗寺において一泊参禅会が実施され、二七名が参加しました。

昭和六十一年から始まった一泊参禅は今年で一二回を数え、最乗寺は一〇年振り二度目になります。

七日の朝、国道の交通渋滞で三〇分ほど出発時間がずれこんだものの、すっきり晴れ渡った空の下貸切バスは東名高速道を一路最乗寺へ。車中、参加者は抱負を語りながら、どこか緊張の面持ち。到着し、現地集合のお三方と合流。早速差定に沿って進められ、張りつめた空気が漂います。

椎名老師の『典座教訓』のご提



唱を受け、二炷の坐禅。夜八時半深々とした闇のなか、御供式に参列。御供式は御膳を道了様にお供えする式です。僧侶の読経のなか、松明の明かりを頼りに、白衣姿の僧が御膳を頭に乘せ、案内の僧に導かれて長い石段を駆け登る。法螺貝や太鼓が鳴り響き、大変神秘的な趣きがあります。

二日目は五時半起床。手早く洗面した後、朝課に列席し、石附山主様のお話を伺いました。

老杉の梢から陽が境内に射し込み、人影のまばらな頃、ほうきや雑布を持って本堂で一時間の作務に励み、心地よい汗を流しました。

一炷の坐禅のあと、前日に引き続き『典座教訓』の四〇段までのご提唱を聞き、正午に下山。

復路は一泊参禅の印象や寺院の方たちとの触れあいを話されたりなかには歌を聞かせてくれた会友もあり、往路とは違ったほっとした雰囲気になりました。大きな霧に巻き込まれることなく無事帰着。

椎名御老師をはじめ、幹事さんのお力添えで有意義な一泊参禅会になりました。

一泊参禅会に参加して

今回の参禅会は、足柄市大雄町の大雄山最乗寺に於て行われ、参加させていただき、有り難く感謝しております。椎名老師はじめ幹事の方々には大変お世話になり、厚く御礼申し上げます。

この度「明珠」編集担当の方より、車の中で話したことについて、原稿を書くよう依頼がありましたので、若干思い出すまま感想を述べさせていただきます。

今回まず最乗寺の山門に入りまして感じましたことは、杉の大樹が亭々と聳えていて、靈氣に満ちた厳肅な気持ちにさせてくれたことです。聞くところによると最乗寺は五百年以上前に慧明禪師により開山され、その時工事を行った五百人力の道了薩埵が天狗の姿と化して大雄山に籠ったというこゝとです。当日夜八時半過ぎ頃から御供式が厳肅に催されましたが、風の吹く音響効果もあり、なんとなく神秘的な様は、今にも天狗が飛来するような雰囲気包まれました。

この杉の大樹は、高さ、径からみて五百年以上は経過したものと推察されますが、最初は小さな

一粒の種（千粒が三g程度）から育てられ、ある程度の大きさで境内に植えられたものと思われます。五百年余の長きに渡り、よき立地条件に恵まれたこともあって、厳しい風雪に耐え、しかも病害虫の被害にも侵されず、よくぞこれまで生きてこられたと、敬虔の念を新たにし、思わず合掌せずにはおられませんでした。

翌朝は山主石附老師より、有り難い法話を拝聴し、その中で道元禪師の歌「峰の色溪のひびきもみなながらわが釈迦牟尼の声と姿と」について、ありのままの姿をありのままに見る見方が大切であることを知らされました。

この歌に関し、この春、新緑の十和田の奥入瀬を訪れたとき、やはりこの歌を思わず口ずさみ、さらに私の拙い歌「奥入瀬の流れのごとくにさらさらとたださらさら」と老いを生きたし」について同行の人達に披露した経緯もあり、石附老師の法話に深く感銘しました。

今回椎名老師からは「典座教訓」の提唱があり、最後の章の「喜心」について、「いわゆる喜心とは喜悅の心なり」ということで、喜心は

あるべきところに調和して、あるがままに生かされていることを感謝することによって、希望と喜びにあふれて自分のただいまの仕事に努め励むことの大切なことを話されました。常日頃の生活の中に

一泊参禅は反省の場

我孫子市 三町 勲

思い返せば、大雄山最乗寺を訪れたのは、昭和六三年の第三回一泊参禅の時でした。あれから十年経過しての今回、再びこの大雄山の老杉生い茂る霊験あらたかな修道の場にやってくる、感慨深いものがある。今回の一泊参禅の参加者は二六名であったが、その中で前回の参加者はわずかに九名であり、この十年間の参禅会の移り変わりを象徴するように思われた。

それにしても、十年前にこの参道を登った時の緊張感や胸のときめきが薄れているように思われて仕方なかった。月例の参禅会で「修行は年数ではない」、「かたちだけの坐禅では何にもならない」などのご老師の戒め通り、私の坐禅はふぬけになってしまったのではないだろうか。今回の一泊参禅では終始このことを自問自答する有様でした。

是非この喜心を生かして行きたいものと思っています。

今後共よろしくご指導ご教示をお願いします。一泊参禅会の皆様方ありがとうございます。合掌

帰宅して早速十年前の「明珠」の一泊参禅の感想文や記事を読み返してみた。その中で、私の目をひきつけたものは、余語翠巖老師の講話「天地法界の風光」であった。それは、大智禪師の次のような偈頌についてのご提唱であった。現成公案、没商量、榮苦氷寒、覆蔵せず。

即心、心即仏を保護して、眉間日夜、毫光を放つ。

つまり、「天地法界の生命は決まりきったもの、きはだは苦く氷は冷たいのと同じだ。我われ一人ひとりが大宇宙の生命の一部である」と安心できれば、毎日の行いはそのまま仏の行だ」と十年前を思い出して頭の中にまとめてみた。

また、「人間の勝手な寸法」で物事を決めつけたり、人の「計らい心」が、自分自身の生活や行動をゆがめてしまうと、ご提唱の中で

強く繰り返されていた。なるほど、われわれの日頃の「計らい心」や「勝手な寸法」が、参禅そのものを「ため坐禅」にしたり、「いねむり坐禅」にしているのではないのかと、改めて考えさせられた。

今度の一泊参禅で緊張感が薄れていた私自身、十年前の余語翠巖老師のご提唱を本当に理解し、修得できなかったことを深く反省させられました。

正法眼蔵慈恵の巻の「僧伽風鈴の公案」の中に、「道理は一法わずかに寂静なれば、萬法ともに寂静なり」とある。色々な事象はそれぞれ互いに係わり合っている、ありのままであると教えているように思われる。係わり合いがあるように推量したり考えたりするのは、人間の「計らい心」や「勝手な寸法」によるものであり、そうして

いることが、われわれ自身を全く理由の分らない迷路に追いやっていくのではないだろうか。因果応報も邪念であることが分かる。ただひたすらに今日一日、この一時、この一瞬を大事にしかもありのままに生きていかなければ、それそのものは立派な行とならない。人の生には、前もなく後もない。一瞬一瞬が、それぞれ独立した事象であり、行であると考えたと、

人間の本来の生き方、即心即仏の世界に近づくことができるのではないだろうか。近づきたいものである。

今回の一泊参禅を機に、この十年を振り返り反省させられた。結局のところ、何度も何度も考えて、渦巻が大きな輪から段々小さくなり、最後に一点に収れんするように、参禅を重ねる修行の中で、道を窮めて行きたいものです。

往時の余語翠巖老師は、昨年の暮にご遷化された。心からご冥福を祈らせていただき、数多き教訓を糧に今後一層参禅に励みたいと思います。



余語老師の墨跡を見あげる



坐禅堂の前にて参加者一同



大広間を掃くときは、こうして…

大雄山最乗寺での一泊二日

埼玉県大井町 石田 七重

龍泉院の坐禅会に、参加させて頂くようになって一年余、今回初めて一泊参禅に参加させて頂きました。集合午前九時、車で龍泉院へ向かいましたが、この朝の思いがけぬ外環自動車道の事故に伴う渋滞に巻き込まれたのと、ラジオの告げる常磐道の渋滞を耳にし、残念ながら折角思い立ちました参加を諦め、外環を降りしました。そして渋滞続きのなか、どうやら集合時間前に龍泉院に連絡がつきました。

私の話を聞かれ、「残念ですね!」と仰ると思い込んでいましたら、いつもの穏やかな、お優しい口調で平然と「では、どうぞ東名か、電車でいらして下さい。」と仰いました。咄嗟に私は参加を断念しました、と答えられず、「はい、では電車で参ります」と。それから自宅へ戻り独り、電車で向かいました。この時の小畑さんの対応は、私に迷う時を与えぬ、正に禅の世界と感じ入りました。

大雄山駅に降り独り大雄山最乗寺へと向かいました。仁王門より三キロメートルあるという参道は、樹齢六百年以上という老杉が、昼なお暗しと生い茂り、参道の両側は濃いブルーの紫陽花が、今、正に咲き充ちていました。左右の紫陽花を楽しみつつも、初参加への不安も抱いておりましたが、仰ぎ見る老杉の雄々たる枝振りが、大丈夫、大丈夫と包み招いていると、勝手に決め込み受付へと向かいました。午後の第一炷目の坐禅は、いつも龍泉院で拝借する坐布との違和感に気を取られ、落ち着かぬ間に、時間がきてしまい、動中の工夫どころか、坐っておりながら



「典座教訓」佳境に入る

坐らなかった、という事になってしまいました。
椎名御老師のご提唱は、『典座教訓』でした。専業主婦として、ごく当然の役割と台所に立つて来ました。もちろん、調理は好きですし、私の役割が、何より家族の健康の基であり、楽しみであるらしい認識と、子供達の喜ぶ様子の中に、こういう立場を与えられ、有難く思うこと、今までもしばしばありました。しかし、役割とか、誰かの為どころか、何より自分を導く道そのものである、という典

座教訓のご提唱は、今後の私にとって文字通り教訓であり、光明となりました。また典座によって大悟した靈祐禪師のお話も、理解し易いご提唱で、大変心に残りました。近年、ともすれば専業主婦の旗色悪く、外に仕事を持つ能力が無いと見られるとか、世の中から取り残されるとか、本当にそう思っている人がかなり居るということです。私はこの度の典座教訓のご提唱を、日常の教訓として、家族の健康を守り、楽しみでもある毎日の食生活に携われる立場に、感謝し、誇りを持って菜を洗い、包丁を持つ、という態度のできるだけ多い自分でありたいと思いました。

この夜は、折しも御供式という行事がありました。晴れた夜空を老杉の枝々が覆い、わずか三つ四つの星が、格別光って見えました。法螺貝、夜太鼓の響き、白狐の姿に扮装した僧が、御供橋を渡り、山の奥への石段を駆け上る、時に高く、時に低く、ひびき渡る声明、暗闇に灯る明りに照らされる山主様の神々しい袈裟、神秘的な行事を目の当りにし、深山の静かな夜に、吸い込まれるような思いでした。

二日目の坐禅では、御老師のと



男性も慣れぬ手つきで…

つてもコワイ時がありました。身の竦む怖さでした。いねむり坐禅へのお説教です。私も龍泉院にての坐禅の中で、思い当る時があるからです。そして、この御老師の怖さは、ある時の経過と共に、心地良く、温かく心に残りました。怖かった、怖かったと、けれど何となくうれしような気持、充足感です。済んでみると何だか良かった、これは坐禅後の感じと似ています。

それから私にとってもう一つ貴重な体験がありました。観光などで、古刹、名刹を訪ねた折、本堂から書院などへの渡り廊下を歩いている人を、羨ましく、不思議に見上げる事があります。どうして



普通の方が、あの場に入れるのかと、そんな私が、六百年の歴史を持つ、最乗寺の堂内から、境内に参詣に見えている人達を見ている。という子どもじみた事です。しかも、ささやかながら本堂の廊下の雑巾がけも、させて頂きました。

ともあれ、御老師の暖かい御指導と、諸先輩の皆様方の、同性では一番人生の先輩の高野様をはじめ、女性の皆様のご親切、お優しさに接することができ、一泊参禅ならではの、尊い御縁を頂き、無事下山しました。日常から飛び出した貴重な二日間の後、戻った日常には、どこか新しい風がそよいでいます。

一夜寝し深山の寺の境内に洗心の滝^{ひとよ}浄くひびけり
老い杉の茂りて靈氣満山に漲ぐる
御寺に一夜坐禅す
初夏に來し老杉茂る山中のあぢさゐの珠^{たま}小さく色濃し
真夜更けて山中に響く法螺貝の神秘なる音と滝落つる音

「食べる」とも立派な修行

八千代市 植村 光伸

龍泉院参禅会の仲間に入れていただいて、まだ日も浅く、宗教については浅薄な私にとって、一泊参禅はめったに機会のない縁で椎名老師、小畑さんはじめ、先輩諸氏のお力添えで参加させて頂くことができました。

しかも、薫風さわやかな季節に、老杉生い茂り靈氣満ちた古刹、大雄山最乗寺で坐禅をすることができ、そして椎名老師の「典座教訓」提唱を聞く機会を与えられ、そこに居合わせた縁に感謝し、禅の風光にふれて、かわいた心に大きな感動と素晴らしい仏教の法悦に包まれました。

私は今年四五歳になりますが、年を重ねるたびに、人間六〇歳までは、地位の上下、貧富、優劣、美醜といった相対的価値観の世界に生きていますが、今やこうした評価の虚しさを感じて、絶対価値の世界にふれないと、人生の根本問題が解決されないまま虚しく過ぎてしまいます。それならば、仕事が一段落し、家庭においても父親の役目に一区切りつく還暦までに得度しようと思いつきながら日々を過ごしております。



下山後、ホッとひと息

そんな折、今回の一泊参禅に参加し、坐禅をするとうちに私の心のうちを見透かすように、椎名老師は「ため坐禅では何にもならん」と喝を入れられました。目的が別にあつて色々なことをするのは手段です。とにかくすべての生きている姿を手段にしない生き方：坐禅もその通りです。

天地の道理の中で、人間の尺度の届かないところで生きていくということはどういうことか、ということをお教え導いてくださいます。

た。

例えば、我々は普段は食べることは体を養う手段だと考えています。しかし毎日欠かすことのできない「食事」は、いい仏道修行の場なのだという。とすれば、当然三度の食事はただ単に食べることで、食欲を満たすことが目的となるのではなく、大事な修行の一つとなつてきます。

生きることは、こうした毎日毎日の行動を修行の場としてとらえていくという、幼い頃からの忘れかけていたことを改めて身をもって学びました。

ですから修行のための食事とはあえて一つのことにひたすら集中し、心を落ちつけていく、そのために無言、無音という条件が修行生活には設けられている。

人は集中して何かを行う時には、動作が慎重に丁寧になる。当然、食べる時には、静かにゆっくりと食べる。人間としての根本の営み、今一番大切な時を過ごしているという、単純でしかも素晴らしい自然の姿、これに気づかれました。そして、その根底には、自分が他の生命を奪って生きさせてもらっていることに心から感謝し、かつ自分の日々の行いが、それに恥じないものであるかどうか反省する。

る、そうした心構えが必要であるということも…。

翻ってみると、私達は人間に生まれてきたから、自分はもちろん家族や他人の食事を作ることができけるのではありませんか。それぞれが働いたり、学んだりできるエネルギーを調理して与えられるのは、思えば人間だけに与えられた能力だと。

命とは不思議だと思いました。どんなことで悩んでも飯を食えば、次の朝、糞になつて出て、それもまた無に帰つてしまうのですから。また、それが私の天職だということも…。

私自身が、日々何げなく行っていた、当たりまえの不思議さに気づかされたのも、椎名老師はじめ先輩諸氏の並々ならぬ人生経験からくるお力添えと深く感謝申し上げます。

人の縁、人の出会いの不思議、その素晴らしさをつくづく感じる次第です。

これからご指導に預かり、長く続けていく所存です。また先輩の皆様、何とぞよろしくお願い申し上げます。

合掌



ほら見事な竹の子だよ

竹林に清風あり



ふんばりの術

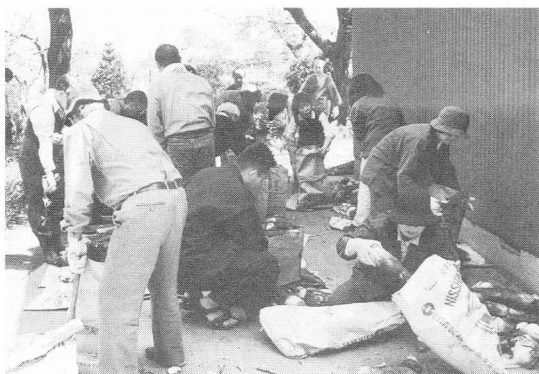


竹の子満載一輪車

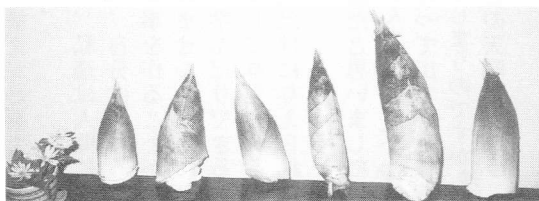
四月の参禅会のあとは、恒例の竹の子掘り。土からほんの少し頭を出している竹の子を探すのは、宝物探しのように楽しい。
クワやシャベルで、それぞれの構えで掘り起こす。一投打で決めてしまうのは、さすが名人寺田さん。ずっと裏方で竹の子を袋に分けて下さっている高野さん、袋を毎年提供して下さる佐藤さん、感謝しています。
それにしても、龍泉院の竹の子は、何故にこんなに美味しいのか？その味の秘密は、やっぱり御老師の徳のお陰という声しきり。
竹の子と一緒に、仏法もほんの少し、近所におすそ分けしたいですね。



エイと飛び上がりの術



最後の袋詰めは大仕事



ゆでる前に
ハイ、ポーズ



足押しの術

感応道交の大施食会

柏市 杉浦上太郎

第四日曜日の月例参禅会、六月初旬の一泊参禅会、一二月の成道会(二、八日の間の日曜日)、そして八月一六日の龍泉院大施食会が私にとって誠に掛け替えのない貴重な修行の時となっております。平素ほとんど修行らしいことを全くしていない私にとって絶対の時なのです。

大施食会は、龍泉院様の年間最大のイベントということで、近在と遠方の方で、総勢二五〇名以上の方が集まってこられます。

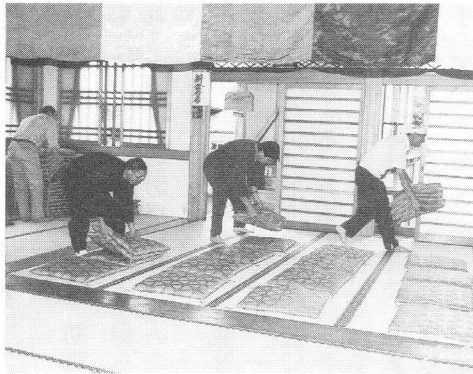
当参禅会でも毎年会員有志によつて作務奉仕をさせていただいております。午前は本堂の飾り付け。午後は一時から開始される法話・法要にご列席の檀信徒様方の駐車場整理・場内整理。法要終了後は膨大な数の御塔婆の本堂前安置。ここまでは男性陣が、そして女性陣は男性陣や檀信徒役員方のお世話役が主な作務となります。

毎年八月一六日は大体が暑い盛りで、全員汗ビショリになって動の修行に勤しむこととなります。特に駐車場整理は炎天下での作務となり、半端な暑さではなく頭がクラクラします。しかし、これは

気持ちのよいクラクラなのです。

今年は、小畑代表、高野さんを筆頭に一三名の方が参加してくださいました。例年通り八時三〇分スタート。午前中は本堂の飾り付け。毎年必ず複雑な手順に戸惑うのですが、今年は三町さんが詳細な記録写真を持参くださり、極めてスムーズに進行することができました。やがて女性陣は昼食のお世話に忙しい一時を過ぎます。午後からは、本堂と駐車場に別れて最後まで勤めさせていただくこととなります。

今年は椎名老師のお話しにより



ますと二五年に一度くらいの涼しさということで、駐車場整理係を志願した私でしたが、あのクラクラがありませんでした。

あのクラクラがよいと思っていた私には一寸物足りないくらい。やがて本堂の殿鐘が鳴り荘厳に大施食会が開始。私たちにも馴染み深い大洞院の木村老師の法話から始まりました。駐車場も一段落し、同役の今泉さんとこの素晴らしい大施食会のことについて語り合い、そのポイントは椎名老師のお人柄にあると結論付けさせていただきました。

毎年、作務の間中気持ちがよいのです。クラクラしてもそうなのです。これはどうしてなのかを



駐車場整理の寸暇の一時に考えました。結論は次記の如くでした。

椎名老師のお側にいられること。会員諸氏と檀家役員の方々と心を合わせて共同作務をさせていただいていること。列席された方々と心の交流が自覚できること。それらの全てが相乗して気持ちがよいのだと思います。

椎名老師を中心にして、集まった全員が、心一つにして御先祖様や友人、知人、そして無縁霊を慰める法要に集中しているその瞬間、まさに感応道交の世界が現出するのだと思います。それが証拠に法要を終えて三々五々帰られる方々の何と清々しいお顔をされておられることか。

また、いつも裏方に徹されて普段あまりお目にかかることの少ない椎名老師の奥方様は、なんと当日は四時から麦茶を沸かすなど大車輪のお忙しさのこと。本当に頭の下がる思いで一杯です。

あれやこれや全て感動の種です。龍泉院大施食会のご利益は、この感動を味わえることです。だからいくら暑くて頭がクラクラしても気持ちがよいのです。そのような訳で私は、来年も再来年もそれ以降もズウット出席させていただくことに決めています。

老いの一日

沼南町 佐藤 初恵

寝ても良し起きて又良し老年は日曆くりて唯明日を待つ時々年の重みに負けそうで起きるのが辛い朝、私はいつも神佛を思う。朝夕自分の手で湯茶を供え、花を飾る。そしてお経を唱える。青森に住んでた時も、また沼南町に住むようになって、たった一つの私の定まった仕事。アアー今日もまた一日きつと無事に生きられる、となんとなく自分で自分に安堵する。

今の今こそ今を生き抜けば生死は常に安堵とならんこんな思いを抱けどバアサンの一日は他愛ない。朝の日課を済ませ朝食の後、息子と孫二人、この三人のうち誰かが時間を繰り合わせて、週に五回ぐらい必ず柏の病院に私を車で送ってくれるよう日程が組まれ、居間の曆に印がつけてある。帰宅はバス利用。大分医者にも顔見知りだけのお友達も出来たけど。

自分なりに何かしたい。この年で、この体で、この経済力で。近所のお友達三人でいつもお茶会があるので、五百円ずつ貯金して、年一回慈善寄付を始めたが、三年

もたったところ、相手の一人が縛られる定期は不満の様になったのですぐやめた。

次の年から私は家族五人の慈善金を集め始めた。一日一〇円、一ヶ月三〇〇円、五人分で月一五〇〇円がたまる。月末の夕食時、テーブルの上に空瓶を出して入れて戴く方法を今は幾年か続けています。差し上げる先はあんまり法の手の届かない所で、年一回でも楽しいおやつを戴けるような所へと一番閑人の私が新聞に目を光らせて探し、送るのです。家族慈善会と名づけて。

年を重ねるにしたがって体が動かなくなる分、相手の事もまた良く理解できるようにします。

文化に溺れる現代人は私達老年の者から見れば、自分達が自分で空気を汚しているようです。幾十年を経て無から全ての物が自然の結合によって生じ、そして生まれた人間。若い時は考えもしなかった自然界の偉大さ、大宇宙のすばらしさ。そしてまた現代人の我がままが恐ろしいような、悲しいような気になります。けれども現実、実際に子や孫に何をどうし

て、それを改めるように導けばよいのでしょうか。今、今。いま私はどんな生き方をして、この世を去れば良いのか。

学校の運動会の招待券を子供達が持つてきてくれる。孫は二人とも成人式をとくに済ませたし、親類もいない。今は子供の数も少なく、小学生の児童は隣組にも見当たらない。でも運動会を見にくのもまた私にできる一つのボランティア。応援の拍手をします。一人より一〇人、一〇人より一〇〇人。老人でもテントの席が一杯なら、運動会をする子供達もきつと喜び、運動会に身が入るだろうと思うのです。

今年からもう一つ、私宛に手紙を書いて持つて来てくれた女の子に、町で売ってない手作りのステ

随想 一一題

『顔』

五〇歳半ばを過ぎると人の顔について興味を抱く。そして自分の顔にも関心を持つ。別にこの歳になり、ナルシストになったわけではない。顔には美醜を越えて、良い顔、そうでもない顔があるようだ。

キな何かを是非プレゼントしたい。そんな夢を見ながら、運動会はすぐそこ。まだまだ決まらず焦るところです。



柏市 加藤 孝

例えば、厳しい修行を積んだ一宗派の管長の顔は、威厳や風格があり自然に人を引きつける。また管長に登り詰めないまでも、修行途中の雲水の顔にも凜然とした心の姿勢が表れ、良い顔が多い。しかし修行時代の厳しさを忘れ、日常性に堕し葬式仏教だけに埋没した様

な僧侶の顔は、目を覆いたいほどである（勿論椎名老師は前者だ）。

これと同様のことは、浮世で生活する我々にも言える。

仕事をやりきり頂点を極めた人間、人間国宝としてその道の達人となつた人、成功した中小企業の経営者、自信と手応えをもつて生きている名もない庶民のなかにも高僧に匹敵するいい顔を見出せる。

私は、この顔の典型として朝倉文雄の作品である「墓守」を即座に思い浮かべる。世間から卑下されがちな仕事を自ら蔑むこと無く、誇りを持って守りきっているという悠々とした自信が伝わってくる。朝倉彫塑館の彼の前に立つたびに圧倒される。姿形は貧しいが、内面に秘めた高潔な気品や超俗の精神が伝わってくる。

人間には歳相応の顔があるが、それを磨くも汚すも、かかって本人の精進によるのであろう。それも、我々俗世の人間は日々の仕事を通じてしか作り上げる場はない。

次々と逮捕者が出る金融疑惑の渦中にある人は一度、「墓守」の前に立ち、我が顔と見比べることをお勧めする。

私も現役サラリーマンとして最終コーナーを回る今、如何にしたい顔に到達するか、思いを致し

ている処である。

『創造主』

暑い夏も過ぎると、展覧会や音楽会が各地で開かれ芸術の秋が到来する。なぜこの時期に集中するのか、私は知らない。

ところで、私の芸術に接する姿勢が変わった。そのきっかけは狩野芳崖の慈母観音という作品を東京芸術大学の陳列館で見たのがきっかけである。

エスキースから、作品に至るまでの数段階の絵が展示されていた。最初の習作から最後の作品までに、精神の高揚が注入されていく過程や、作者の慈母観音への同化過程がよく分かった。その繊細な一本一本の線はとても人間業ではない。また微妙な色彩も自然界には存在しないものである。

この絵を観る以前の私の絵画観は「みる、見る」段階に止まり、作家を通して作品に具現する精神の昇華までを受信するに至らなかった。すなわち、「観る」事をしていなかったのである。皮相的鑑賞の範囲であった。

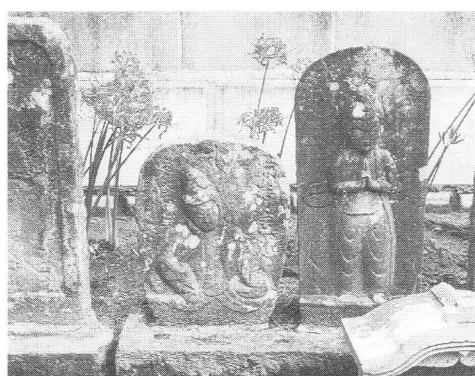
芸大での体験以後、芸術作品とは、創造主が作家に宿って現出せしめる昇華であると理解するようになった。我々凡人と優れた芸術家との差異は、創造主からの声を

聞き取れるほど精神が輝いているかどうかであろう。この精神の輝きは、生まれながらにして有している人もいれば、懸命な努力によって獲得する人もいる。更に、作家に宿った内なる声を聞き取る豊かな感性も、優れた作品創造のための必須要件である。

★龍泉院のご紹介★
龍泉院は天徳山と号し、本尊釈迦牟尼仏をまつる。鎌倉時代中期の建長五年（一二五三）、泉村に伽藍が建てられたのが創めである。

当院の開山、量指長英和尚は木更津市真里谷（まろや）真如寺の第六世で、下総一帯を治めていた相馬氏が天文年間（一五三二～五五）ごろ、真如寺の量指和尚を請して曹洞宗龍泉院の開山初祖とした。

新たな視点から芸術作品に接するようになって以来、今まで気づかなかった部分が見えてきたような気がする。また、作品に込められた精神と対話する楽しが増えた。芸大で見た一枚の絵は、芸術に接する心を開かせてくれた。



と、突然その泉から天龍が現れた、と見るやたちまち小さな形に変わった。開山は驚いてこれを取り上げ、押しただいて衣の袖に包み、早速帰山して読経供養し、寺の靈宝として尊崇した。この奇瑞によって、寺の名を天徳山龍泉院と定めた、と伝えられている。

現在の寺域は寛永年間、五世幽谷の時、伽藍すべてが建立された。戦後の農地解放等の激動期を乗り越え、仏法広宣の伝統を堅守。現住職は三世椎名宏雄老師。駒澤大学講師、町史編纂等ご活躍中。

龍泉院参禅会簡介

一、日時 毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）

一、坐禅 止静 鐘 三声 坐禅

経行 鐘 二声 経行

放禅 鐘 一声 放禅

一、講義 木版三通 開経偈を唱えて「正法眼蔵」の提唱を聞く。

講師 龍泉院住職 椎名宏雄老師

平成九年三月より「慇懃」の巻を提唱

一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談

正午解散

一、参加資格 年齢、性別を問わずどなたでも参加できます。

一、会費 無料

一、成道会坐禅

月例参禅会の他に毎年一二月の第一あるいは第二日曜。（本年は一二月七日）

釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後、法話を聴聞、点心（昼食）を共にする。

沼南雑記

参禅会記録（）中は座談の司会者
平成九年

●四月二七日 三四名

（宮田 哲男氏）

●五月二五日 三〇名

（牧野 洋子氏）

●六月七日～八日

一泊参禅会 二七名

於 大雄山最乗寺

幹事 宮内 守氏

加藤 孝氏

●六月二二日 二五名

（高野千代子氏）

●七月二七日 二七名

（安本小太郎氏）

●八月一六日 一三名

「龍泉院施食会」作務奉仕

●八月二四日 二九名

法話 木村誠治老師

●九月二八日 二九名

（添田 昌弘氏）

●九月二八日 二九名

（宮本 茂氏）

▼大雄山の老杉に耳を当て、木の声を聴いてきた。そして時折、故余語老師の御著書を開けてみる。

▼きょうのひと日に感謝して、「一日一〇円」。これがなかなか出来ないんだなあ。一ヶ月まとめて三〇〇円ならできるかな。佐藤さんに

頭が下がります。

▼一回参禅会を休むと龍泉院境内の時の花に会えないのが淋しい。九月は曼珠沙華を見逃してしまった。体調を整えることが先決。

▼篠原佳年著「快癒力」によると病氣は、自分らしくない生き方―無理から生じる赤信号なのだから自分を見つめ直す―がたいものだ。という。とはいえ病氣は辛い。

▼マザーテレサとシスター達の持ち物は、質素な衣を洗うバケツと石鹸だけだったとか。（吾亦紅）

▼佐藤さんの文章読後から想起。「彼らは過ぎ去ったことを思いだして悲しむ事もないし、未来のことにあくせくする事もなく、ただ現在のことで暮らしている。それだから、顔色が明朗なのである。」（サンユッタ・ニカーナ）

▼貧民街の聖女・マザーテレサが九月五日亡くなった。その一生はブッダの姿と重なって見える。菩薩行の姿を世界中に見せて逝った。

「仏陀最後の旅」で、この世に留って欲しいと懇願する愛弟子アーナンダの言葉は、そのままマザーに対する私達の総ての声だった。多くの民衆や宗教者を集めた葬儀も終った。マザーが灯した明かりを自分の手に移して生きていけるだろうか。（佇泉）